

う。後年の作品中、この時代に材をとったものに、小品の「稲盗人」「紙繰り」「昨日の人々」「風の中の唄」など数多く、又、文学活動の一転期となったと思われる「赤い鳥」所載の童謡では、とくに曲金の土の匂いの立ちのぼるような「青鳩」「鴉鴉」「廻り燈籠」「子雀」が挙げられるし、「子供達の歌」シリーズの歌詞にも「からくり」「秋の夜」「山は夕焼」「月夜の畑」など、いずれも曲金時代におのずと育くまれた詩魂の流露であり、その頂点に「背くらべ」がある、とすることもできよう。

海野家が先祖以来続いた曲金の地を離れ、静岡市鷹匠町3丁目38番地に移ったのはこの年の秋と考えられる。移転の原因を、厚の評伝の中で草柳大蔵は、「我が国が重工業を軸に経済体質を変えてゆくとき」という大状況のもとでの小状況3つを挙げ、  
「明治36年さしもの名家が解体した」と記している。草柳はこのルポルタージュ風の評伝を書くに当たって、当時海野一族の長老ともいへべき海野晋吉に取材している、信ぴょう性は高いといえようが、明治36年解体云々は、文のあやか？  
既述のように、その年取りこわしたのは家屋敷の一部であった。  
（評伝は月刊「芸術生活」171号・昭和37年6月号所載）

ともあれ移転は、明治43年春の厚の中学進学、5月祖母米子の死去という2つの事があって、実現性を帯びたと言えるのではないか。したがって前記43年10月の裏書きのある写真は、人物の服装などからかなりあらたまった記念のものと考えられるところから、鷹匠町移転に当たっての、曲金の屋敷で撮った最後の一葉という推理も成り立つ。

他に、44年春、秋、45年春が考えられるので、幅をもって言うなら、明治43年秋から45年春までの春か秋の季節に、安倍郡曲金村から静岡市鷹匠町3丁目への移転は行われたということになる。

## ●鷹匠町時代（明治44年～大正4年）

▽明治44年（1911）

4月・静岡中学二年。

8月7日・富士登山。亮之助、欣也も同行。（6頁写真参照）

▽大正2年（1913）

3月13日・春樹生まれる。

8月12日・満17歳、静岡中学四年。

厚の晩年の随筆「浜町雑記」に、このころの回想がある。

静岡中学では新聞部に属していたと伝えられる。その資料は皆無にひとしいが、現存の写真（2頁参照）の中に、友人と二人で新聞紙の中央を破りそこからよせ合った顔をつき出している奇抜な一葉がある。二人が新聞部員たることを示した構図かと思われる。

静岡時代の厚一について、同級生の福地省吾（静岡市鷹匠町、医師）の談話がある。

「けっして軟派ではないのだが、文学趣味のおとなしい少年だった。当時の校内は尚武のふんいきが強く、海野のようなのはあまり喜ばれず、本人はさびしかったのではない。五年の